

丸系八つ頭の種芋安定生産と緊急活用技術

農業技術研究センター（高収益畑作担当）

キーワード：丸系八つ頭、八つ頭、栽培、種芋

1 技術の特徴

「丸系八つ頭」は、本県が従来の八つ頭の中から丸い形状となるものを選抜し、系統選抜を繰り返して形状が安定して丸くなるよう育成した系統である。次作の種芋には20～60gの分球芋を使用するが、特性上20g未満の小さい芋が多数であるため、種芋数の確保が難しい。

そこで、「丸系八つ頭」の種芋を効率的かつ安定的に確保するための栽培技術の開発と、種芋として未利用の極小芋及び親芋の活用を検討した。

2 技術内容

(1) 種芋増収技術の確立

ア 優良種芋の確保には、植え付けする種芋重が30gの場合、株間30cm、畝間120cmでの栽培が適している。この条件は普通植え（4月上旬、マルチ被覆）、早植え（3月中旬、マルチ被覆、トンネル栽培）とも同様に種芋を効率的に確保できる。（図1）

イ 種芋個数の確保には栽植密度を高めることが有効と考えられる（図2）。親芋の収量は株間30cmと35cmでは有意な差は認められず、親芋販売でも同等の収益が得られる（図3）。

(2) 未利用芋等の種芋利用の検討

ア 利用されていない10g以下の子芋・孫芋・ひ孫芋（以下、極小芋）は、保温マットで加温育苗し5月上旬に露地へ定植することで、収穫できる親芋はやや小さくなる（表1）が、利用が可能である。

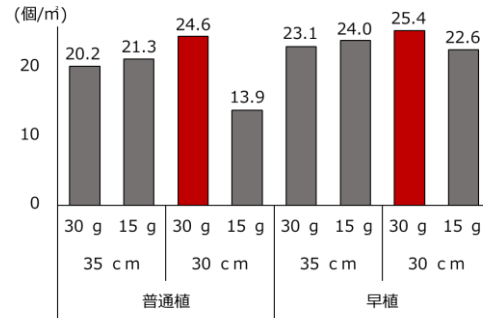
イ 親芋は、写真1のように芽を残して分割し、直植えすることで、収穫できる親芋は慣行より小型化する（表2）が、利用が可能である。



写真1 親芋の分割

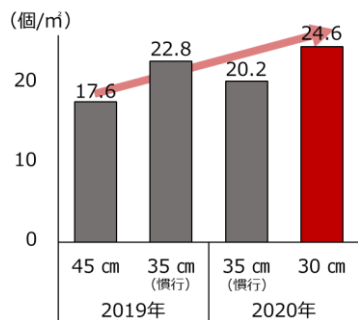
ウ 未利用芋の利用にあたり、育苗は196,000円/10a、親芋の分割労賃は43,000円/10aとコストを要するほか、親芋の販売代金減収を見越す必要があるため、種芋不足時の緊急増殖技術として考慮する必要がある。

3 具体的データ



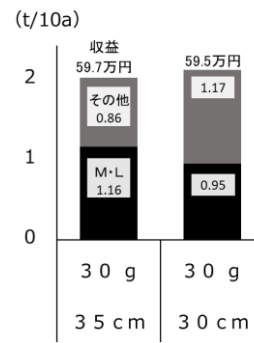
※植付日は「早植」2020年3月17日、「普通植」4月7日。収穫日はいずれも11月10日。

図1 植付時期、株間、植え付けた種芋重の違いによる種芋 (20~60g分球芋) 数



※収穫日は2019年11月26日、2020年11月10日。

図2 株間の違いによる種芋 (20~60g分球芋) 数



※2020年調査

図3 株間の違いによる親芋収量と収益

表1 極小芋と慣行の親芋重

処理区	親芋1個重 (g)
慣行	1146.0
極小芋の苗	996.0

1区3株 2反復の平均値。2019年11月収穫。

表2 分割芋と慣行の親芋収量

処理区	親芋1個重 (g)	規格別親芋割合 (個数%)						外
		2 L	L	M	S*	A	B	
慣行	954.4	5.0	35.0	20.0	5.0	0.0	35.0	0.0
分割芋	673.3	7.1	22.6	23.8	22.6	16.7	0.0	7.1

1区7株 2反復の平均値。2020年11月収穫。「*」は有意差あり、無印はなし (有意水準5%)。

4 適用地域

県内丸系八つ頭産地

5 普及指導上の留意点

- 本技術を掲載した栽培マニュアル「丸系八つ頭」の栽培方法も併せて活用し、栽培する。
マニュアル掲載サイト (<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0909/kousyuueki-hatasaku.html>)
- 親芋を利用する際は、分割後に殺菌処理 (チウラム・ベノミル水和剤20を0.4%粉衣または20倍液に1分間浸漬) を行うとともに、補植分を見越して苗を生産する。

6 試験課題名 (試験期間)、担当

サトイモ類の種芋安定生産と貯蔵技術の確立 (2018~2020)、高収益畑作担当